

秋雲による催眠 サンプル

「ねー提督一、ちょっと実験台になってよー」

鎮守府の廊下で、中肉中背の男に少女が声を掛ける。
男は提督。鎮守府と呼ばれる戦闘組織を束ねる長たる人間である。

少女は秋雲。戦闘要員である艦娘——過去の艦艇の顕現したるもの——の一員。
茶色の長い髪を後ろ頭で束ねた、小学校高学年から中学生くらいの小柄な少女然とした存在である。

軍隊、それも旧軍の規律的には無茶苦茶な口調と行動だが、鎮守府というのは基本的にゆるい。
戦闘職への絶対的な命令権こそ提督は持つものの、日常的なレベルでの上下は殆ど意識されるものではなかった。

「なんだ実験台とは……」

呆れ顔で提督は返す。またぞろ何か妙な事を始めたのか？と思う。
秋雲は所謂オタクだ。それも、創作者に類する。

「催眠術。今ちょーっと巻雲とかが捕まらなくてさー、いいでしょー？」

提督の扱いは巻雲、妹レベルであった。

「……仕方ない。この書類の記入が終わったらだ」

提督は手に持っていた数枚の書類を見せると、嘆息した。
秋雲を止める事などそうそう出来る物ではないことは、彼が一番よく知っていたからだ。
夏と冬の祭りには半休を取って抜け出し、参加後そのまま戦闘に友軍として加入したとすらある彼女だ。
どうしようもないのは分かり切った事だった。



「あなたは段々眠くなる……」

実験は秋雲たちの部屋で分かり易くベタな所から始まった。

「はい、それじゃ命令いくよー」

生年月日や過去の事など、答えやすい事を返答させるなど簡単な事から始まり、
そこから徐々に突っ込んだ事をさせ、掛かり具合を見ていくのだった。

「じゃあ次、貴方は犬です。お手！」

すっと右手を出し、秋雲の手に提督は手を乗せた。

「おまわり！」

椅子を降りた提督は床をぐるぐると四つん這いで回った。

「んー……」

さて、現状は今のところ微妙であった。
単に付き合いが良かっただけだったり、からかう為にやっているのかの区別がつかないからだ。

秋雲による催眠 サンプル

「じゃあ……ズボン脱いで！」

ついに秋雲は、禁断の命令に手を染め始めた。
秋雲の命令と共に、提督はベルトを外し白いズボンを脱ぎ捨てた。

「……パンツも」

すっ、と下着が脱がれ、提督は下半身を裸にした。

「おおー……」

まじまじと股間を眺める秋雲は、そのまま写真を撮影し始めた。
同人誌の資料にする為である。そして秋雲は、更なる命令を下す。

「じゃ、ちょっと硬くしてみせてくれるかな？」

勃起させろ、という命令に対しても提督は素直に従った。
剥けたペニスを手に取ると、そのまま肉棒を刺激し秋雲の眼前で屹立させる。

「ほほお……なるほどなるほど？」

正面や側面から勃起した股間を写真を撮りつつじろじろと眺める秋雲。
やっている事は完全に痴女というかもうダメな感じだが、テンションの上がった秋雲は気にしていなかった。

「じゃあ次は発射、いってみよっか！」

鬼であった。
秋雲が動画を撮影する中、下半身裸の提督は肉棒をしごき続ける。
誰かに見られでもしたら大スキャンダルな倒錯的場面が展開され、提督のオナニー動画が作成されていく。

そして数分後……。

「なるほどー、こんな勢いで……」

テンションが上がって赤面した秋雲の目の前で、白濁が宙を舞った。

「それじゃ、次は……」

と次の命令に移ろうとした所で、ドアがノックされる。

「秋雲ー、帰ってきたんだけどー。開けてよー」
「やっば！ 提督、ズボン履いて！」

鍵を掛けてあるとはいえ、時間はそう稼げない。
秋雲はズボンを上げる提督を横目に、床に撒かれた精液をティッシュで拭い、消臭剤を撒く。

「秋雲、に司令官様！ か、鍵なんかかけて二人で何してたの？」

巻雲の言葉に内心焦りまくりながら、秋雲は何とか取り繕う。

「い、いやー、新しい原稿の男性心理についてアドバイスをと……」
「司令官様にいやらしい絵を見せて……！？ まったくもう、秋雲ったらー！」

秋雲による催眠 サンプル

そうしている間も、催眠の解けていない提督は棒立ちのままだった。

「あ、提督、もう仕事戻っていいから！」

そう言って背中を押して部屋から出すと、一旦ドアを閉めて秋雲は息をついた。

「はあ、危なかったー……。うーん、しかし、随分しっかり掛かってくれたなー。うひひ」

にやりと笑う秋雲であった。